

聞き手のパーソナル・テリトリーに関わる談話分析

—日本人・韓国人・中国人母語話者の調査を通して—

許 明子

要 旨

本研究は、日本語母語話者、韓国人日本語学習者、中国人日本語学習者が聞き手のパーソナル・テリトリーに関わる内容について言及する際に、どのような談話を構成し、どのような言語表現形式を使用するかについて分析を行ったものである。談話を構成する言語内容として「呼びかけ」「命題」「相手に対する配慮」の3つに分類し、考察を行った。その結果、相手に対する配慮表現に大きな違いが存在していることが明らかになった。

日本語母語話者は聞き手のパーソナル・テリトリーに踏み込まないように丁寧な表現を使用し、距離感を保つための表現を用いていたのに対して、韓国人・中国人日本語学習者は助言や申し出のような踏み込んだ言及が見られた。また、推量の意味を表す「ようだ」および丁寧さを表すための敬語の使用についても異なる特徴を有していることが明らかになった。

【キーワード】 パーソナル・テリトリー 談話構成 言語表現形式 配慮表現

Discourse Analysis about the Personal Territory of the Listener: A Questionnaire Survey of Japanese Native Speakers, and Korean and Chinese Japanese Learners

HEO Myeongja

【Abstract】 The present study examines the ways in which the participants structured their discourse, and what kinds of linguistic forms they used when speaking on topics falling within the listener's personal territory. The participants were native speakers of Japanese, and Korean and Chinese learners of Japanese. The structural components of the discourse were categorized as being either (1) calling, (2) proposition, or (3) consideration to the listener. The findings show that a striking difference exists between participant groups in terms of use of expressions related to consideration of the listener.

Japanese native speaking participants were found to use polite expressions which avoid entering into the personal territory of the listener, and to maintain a sense of distance. In comparison, the Korean and Chinese learners of Japanese were found to be direct in giving advice and making proposals, for example. Furthermore, the results make clear that differences exist between the participant groups in regard to the use of the modal expression *yoo da*, and honorific language.

【Keywords】 Personal territory, Discourse structure, Linguistic form,
Considerate expressions

1. はじめに

われわれは誰かとコミュニケーション活動を行う際に、意識的に、もしくは無意識的に話し手と聞き手の親疎関係、上下関係、など様々な関係を考慮し、コミュニケーション・スタイルを決定している。任栄哲 (2006: 9) は「コミュニケーション・スタイル」について、会話を円滑に運ぶための戦略であり、いつ話しはじめいつ止めるか、どんな話題を選んだらいいか、どんな調子でどのくらいの速さで話すかなどが含まれると述べている。話し手と聞き手の間でコミュニケーション・スタイルにおいて共有できる部分が多い場合はコミュニケーション活動が円滑に進むであろう。しかし、逆にコミュニケーション・スタイルが異なる者同士がコミュニケーションを行う際は誤解が生じたり、摩擦が生じたりすることもあるだろう。

外国人日本語学習者が日本語母語話者とコミュニケーションを行う際にコミュニケーション・スタイルの違いによる誤解や、不理解が生じることは多々ある。外国人日本語学習者にとって日本人の言語行動やコミュニケーション・スタイルを理解し、円滑なコミュニケーションを行うことは容易なことではない。文法的には正しい発話であっても、相手を不愉快にさせたり、丁寧さの観点からは不適切な発話を行ったりすることがある。

本研究ではコミュニケーション・スタイルの中でも特に聞き手のパーソナル・テリトリー、もしくは私的領域に関わる日本語の発話の分析を行い、日本語学習者のコミュニケーション・スタイルの問題点について考察する。日本語母語話者 (以下、JNS) と韓国人日本語学習者 (以下、KJL)、中国人日本語学習者 (以下、CJL) の聞き手の私的領域に対する発話にどのような相違点があるかについて考察を行うことによって、日本語学習者のより円滑なコミュニケーション活動を指導するためのきっかけを探るのが本稿の目的である。

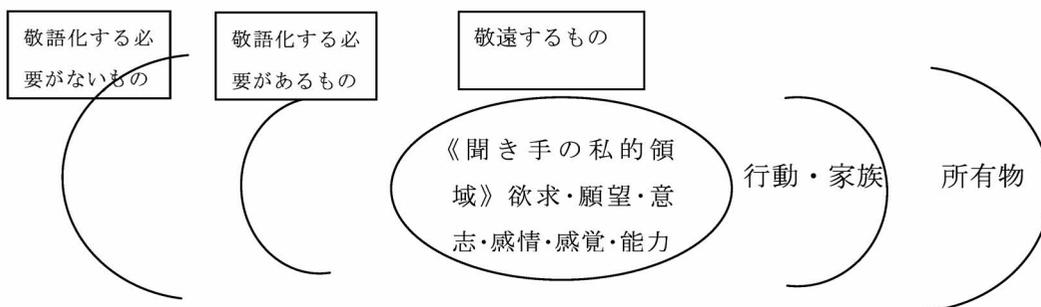
2. パーソナル・テリトリーとは

2.1 聞き手の私的領域

鈴木 (1997) では、丁寧体で表現する際に聞き手の私的領域を侵害しないことが重要であると指摘し、聞き手に対して丁寧さを保つためには、話し手と聞き手の間に一線を引いて、話し手側のことと聞き手側のこととはっきり分けて表現することが基本であると述べている。聞き手の私的領域に関連のある内容の発話を避けることによって、丁寧さが保たれるとしている。言い換えると、聞き手の私的領域に踏み込んだ発話を行った場合、丁寧さに欠け、不適切な発話につながる恐れがあると言える。

聞き手の私的領域に含まれる言語内容としては、アイデンティティ、欲求、希望、願望、意志、感情、感覚などがあり、これらの言語内容について言及する際には、それぞれの段階において適切な表現形式を選択しなければならない。鈴木 (1997: 62) の聞き手の私的領域の概念に基づいて、私的領域の段階性とそれに関連する言語内容および言語形式の選

扱について<図1>のようにまとめることができる。



<図1> 聞き手の領域に関する制限の段階性

<図1>で示している聞き手の領域の段階性とそれに関連する言語表現の制限というのは、聞き手の私的領域の中心部にある「聞き手の欲求、願望、意思、感情、感覚、能力」などに関する発話を避け、周辺部に位置する「聞き手の行動や家族、所有物」などについては敬語を用いる必要があるということを表している。

JNSは意識的であれ無意識的であれ聞き手の私的領域に関する認識を持っており、それぞれの段階において適切な言語表現形式を選択しているだろう。一方、外国人日本語学習者は、<図1>で示したような聞き手の私的領域に関する言語内容やそれぞれの段階において選択されるべき言語形式に関する意識が日本人と異なったり、ずれていたりすることが多く、コミュニケーション上の問題を感じている学習者が少なくない。

KJLの場合、話し手と聞き手との領域を区別するより、あえて相手の私的領域に踏み込んだ発話を行うことによって、両者の距離感を縮め、親近感を表す。たとえ聞き手の私的領域に関わる言語内容であっても意図的に言及したり、話し手の主観的な考えを述べたりすることが多く、それによって相手との共有感を作り、コミュニケーションを行う傾向がある（許 2010b）。また、CJLの場合もKJLと同じように、聞き手の私的領域に踏み込んだ発話を行うことによって、相手との親密な関係を築こうとする傾向がある（許・孟 2010）。KJLとCJLは聞き手の私的領域に関する意識がJNSとは異なり、発話内容や言語形式にも違いが生じる可能性が高いことを示唆している。

2.2 所有傾斜

目上の相手の所有物について言及する場合、敬語を使って表現するということは前述した通りであるが、日本語の敬語表現の自然さ、適切さについて角田（1990、1991）は「所有傾斜」の概念が重要であると述べている。角田（1991：119）の所有傾斜とは、相手の所有物の中で最も聞き手の身体や属性に関しては最も敬意の度合いを高める必要があり、

その他の所有物には敬意を表す必要が弱くなるという概念であり、以下のような段階があると述べている。

身体部分 > 属性 > 衣類 > (親類) >
愛玩動物 > 作品 > その他の所有物

＜図 2＞ 所有傾斜の段階

所有物の中でも聞き手の領域に最も近いもの（身体部分）が敬語使用の必要性が高く、丁寧な表現を用いる必要がある。次に、相手の属性、衣類、愛玩動物、作品、その他の所有物の順に傾斜が低くなるとされている。日本の日常生活のコミュニケーションでは聞き手の身体部分や特徴、外見などについてあまり言及せず、JNSは意識的に回避していると思われる。たとえ、聞き手の身体部分等については、敬語を使用して丁寧に表現したとしても不快感を与えかねないためであろう。

他方、KJLは聞き手が初対面の場合でも身体部分や外見、表情、属性、衣類などの所有物、またそれに関する話し手の感想などについても、あいさつ代わりに気軽に言及する傾向がある（許 2009、2010b）。初対面の韓国人から年齢、結婚経験の有無、家族構成、学歴、職歴などのプライバシーに関わる内容について質問攻めに遭い戸惑ったという日本人の経験談はよく聞くエピソードである。KJLにとって所有傾斜の概念はあまり重要ではなく、あえて相手の所有物等に言及することによって、相手に対して親近感を示したり、距離感を縮めたり、話題転換をはかったりするコミュニケーション・スタイルをとっているのである。

以上の先行研究からも分かるように、「聞き手の私的領域」や「所有傾斜」の概念は、話し手が聞き手と適宜な距離や丁寧さを保ちつつ、円滑なコミュニケーションを行う上で重要な概念であると言える。したがって、日本語教育現場においても学習者に日本人のコミュニケーション・スタイルを理解させ、適切な発話を行うようにするためには、学習者の現状を理解し、それにあった適切な指導が必要であると言える。

2.3 パーソナル・テリトリー

本研究では、「私的領域」「所有傾斜」の概念に基づいて、外国人日本語学習者が日本人とコミュニケーション活動を行ううえで、パーソナル・テリトリーの概念を理解することが最も重要であることを主張する。パーソナル・テリトリーとは、人がそれぞれ持っている固有の「個人領域」を指し示す概念であると定義する。パーソナル・テリトリーに関わる内容としては以下のものが含まれる。

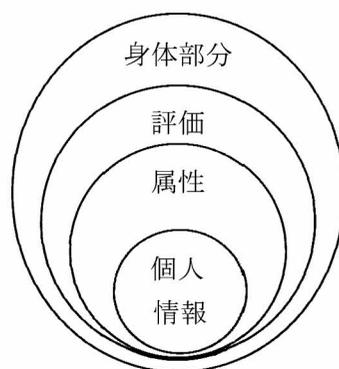
I アイデンティティに関わる内容：

- 1) 個人情報：年齢、結婚経験の有無、家族構成、学歴、職歴、職位など
- 2) 属性：思考、願望、欲求、性格など
- 3) 評価：能力、収入など

II 身体部分：身体的な特徴、体格、健康状態、表情、外見など

III 所有物：持ち物、著書、作品など

パーソナル・テリトリーに関わる内容には段階性があり、以下のような最も中心部に位置するものと周辺部に位置するものがあると思われる。



<図3> パーソナル・テリトリーの段階性

パーソナル・テリトリーの中で個人情報是最も中心部に位置し、一般的には言及が避けられる。外側に位置する所有物等について言及する場合は相手のテリトリーに踏み込んだ補償として何らかのストラテジーが使われるのが一般的である。したがって、特別な場合でないときにパーソナル・テリトリーに関わる言語内容について聞いたり、初対面の人に対して質問責めをしたり、あいさつ代わりに気軽に言及したりすると、聞き手に対して不快感を与えたり、誤解を生じさせたりする可能性がある。

しかし、KJLやCJLはしばしば聞き手との距離感を縮めるためのストラテジーとして意図的にパーソナル・テリトリーに踏み込んだ発言を行うことがある。日本語の学習がある程度進んだ中上級レベルの学習者でも聞き手との距離感が保てず、無礼な言い方をする学生が見受けられるのはパーソナル・テリトリーに関する認識のずれが一つの原因ではないかと考えられる。

本研究では目上の聞き手に対して健康状態をうかがう場面で、JNS、KJL、CJLがどのように表現するかに関する調査を通して、3者のパーソナル・テリトリーに関する認識や表現形式について比較分析を行う。

3. 調査概要

3.1 調査対象

許 (2010a) ではJNS、KJLの依頼場面において使用する言語形式の違いについて行った調査の中で「友達にレポートを見せてほしい」と依頼する場面と、「先生の体調を気遣う」場面を取り上げてどのような言語形式を用いるかについて分析を行った。その結果、日本人と韓国人の間には言及する言語内容および言語表現形式において相違点が存在することが明らかになった。

本研究では、許 (2010a) の調査をもとにKJLに対して追加調査を行うとともにCJLにも調査を実施し、その結果について考察を行う。許 (2010a) ではKJLは24名であったが、韓国中等教育機関の現職日本語教師11名を調査対象に追加し、CJLは筑波大学で学んでいる中国語母語話者27名を対象に追加調査を行った。KJL、CJLのいずれも日本語力は中上級以上のレベルであり、文法的な間違いはあるものの日本語による意思疎通には問題を感じないという学習者であった。

調査対象をまとめると以下の通りである。

- ・JNS：筑波大学で学んでいる日本人大学生および大学院生29名
- ・KJL：筑波大学で学んでいる韓国人留学生24名
韓国中等教育機関現職日本語教師11名
- ・CJL：筑波大学で学んでいる中国人留学生27名

3.2 調査内容および方法

本研究は聞き手のパーソナル・テリトリーに関わる内容について日本人と外国人日本語学習者の談話構成および言語形式の違いに焦点を当てているため、調査内容の中で、先生の体調を気遣う場面のみ分析の対象とし、3者の相違点について考察を行った。

調査の内容として先生の体調を気遣うという場面を設定したのは次の2つの理由からである。

- ①聞き手が先生であるため、丁寧体を使用して表現する。上下の力関係¹が明確な相手に対して、パーソナル・テリトリーに関わる内容をどのように表現するかを考察することによって3者のコミュニケーション・スタイルの特徴を探る。
- ②先生の体調もしくは健康状態に関する発話はパーソナル・テリトリーに関わるものであり、日本人は一般的に言及を避けるが、韓国人、中国人学習者は言及することが多いと予測される。したがって、それぞれの調査対象のコミュニケーション・スタイルの違いが表れやすい場面である。

今回の調査も前回同様、学習目標言語である日本語、そして母語である韓国語もしくは中国語で自由記述式に回答してもらった。本研究では、KJLとCJLの日本語による表現を

分析するとともに、母語の影響について考察するために、韓国語と中国語の表現についても分析を行う。学習者の母語を分析することによって配慮表現に関する発想を探り、日本語学習への影響について考察する。

4. 談話構成および表現形式

調査の結果について、談話を構成する言語内容と、それぞれの言語内容を表現するために使用された言語形式の両側面から分析を行う。中田（1990）によると、発話の持つ特徴を考察する際の基本的な軸となるものは、次の6つの要因であるという。

- ①発話要因
- ②話し手と聞き手、および両者の関係
- ③働きかけの仕方（発話行為の調子、姿勢なども含む）
- ④述べられる命題の種類
- ⑤談話における位置づけ、談話中の他の発話との関わり方
- ⑥その他、発話の「場」を構成する要因

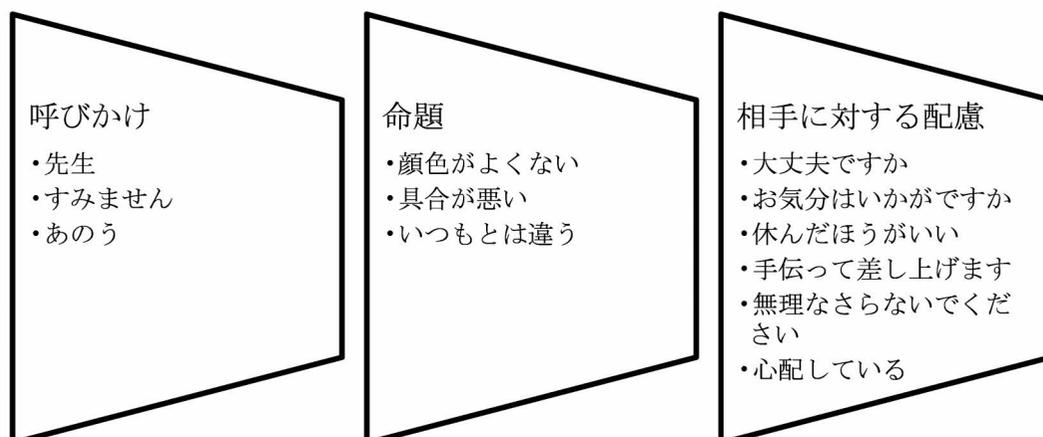
中田（1990）、熊谷（1995）では依頼の場面における発話を対象にmove分析を通して発話の特徴を明らかにした。丁寧な表現を用いるグループは談話を構成する要素が多く、move数の平均も高いことを明らかにした。

本研究では、談話を構成する言語内容を分析を通してJNS、KJL、CJLの発話の特徴を探る。同時に、命題を表現するために使われた言語表現形式を分析し、日本人と外国人学習者の言語表現形式について比較を行う。

4.1 談話構成言語内容

本研究では、談話を構成する言語内容は大きく「呼びかけ」「命題」「相手に対する配慮表現」の3つの要素に分類する。呼びかけは「先生、すみません、あのう」など、命題は「顔色が悪い、具合が悪い」など、相手に対する配慮表現は「大丈夫ですか、お気分はいかがですか、心配している」などの表現が使われていた。

以上の談話を構成する言語内容は出現する順番は前後しているが、多くの場合、3者ともに3つの内容について言及していた。これらの構成要素を図で表すと次の<図3>の通りである。



＜図 3＞ 談話構成の要素

分析の結果、3者ともに「呼びかけ」「命題」「相手に対する配慮表現」の要素を組み合わせられており、談話構成面では類似していた。しかし、それぞれの談話構成の要素の使用数は異なっており、CJLが3.5で一番多く、次がKJLで3.2、JNSが2.6で一番少なかった。談話構成要素の使用数についてまとめると以下の＜表 1＞のようになる。

＜表 1＞ 談話構成要素の使用平均数

	言語内容
JNS	2.6
KJL	3.2
CJL	3.5

以上の結果から、JNSは多くの言語内容を含まず簡略に談話を構成する傾向があるのに対して、KJLとCJLはより多くの言語内容を用いて表現する傾向があることが分かった。JNSには「具合が悪いですか」のような命題のみ表現している人もいたが、KJLとCJLにはそのような表現は見られなかった。KJLとCJLは色々な表現を用いることによって、相手を気遣う話し手自身の気持ちを伝えたり、聞き手に対する親近感を表そうとしたのではないと思われる。日本語母語話者と外国人学習者の間には発話スタイルの違いが存在しているといえる。

JNS、KJL、CJLの回答例を通して発話の特徴について考察する。以下の回答例は、3者の談話構成の特徴を見るために、組み合わせの異なる例を中心にあげる。〈 〉は言語内容を表す構成要素の組み合わせを示す。

【JNS】

- ・どこか具合が悪いのですか？²〈命題〉
- ・先生、どこか具合が悪いですか。〈呼びかけ→命題〉
- ・先生、なんだか調子がよろしくないようですが、具合のほう、いかがでしょうか。〈呼びかけ→命題→配慮〉
- ・先生、顔色が悪いようですが…、大丈夫ですか？無理なさらないでください。皆心配しています。〈呼びかけ→命題→配慮→配慮→配慮〉

【KJL】

- ・先生、体調は大丈夫ですか。〈呼びかけ→配慮〉
- ・先生、顔色がいつもと違いますが、どうかしましたか？〈呼びかけ→命題→配慮〉
- ・先生、顔色がよくないですけど、大丈夫ですか。少しお休みになった方がよろしいと思うのですが。〈呼びかけ→命題→配慮→配慮〉
- ・先生、顔色がきのうと違う気がします、かぜぎみでしょうか。私ができることならなんでもおしゃってください。もっともっとがんばりますので…。〈呼びかけ→命題→命題→配慮→配慮〉

【CJL】

- ・先生の顔色がちょっとよくないですね。ごきげんはいかがでしょう。〈命題→配慮〉
- ・先生、ちょっと具合が悪そうに見えるんですが、体調は大丈夫ですか。〈呼びかけ→命題→配慮〉
- ・先生、今日の顔色がよくないですね。調子が悪いですか。大丈夫ですか。〈呼びかけ→命題→命題→配慮〉
- ・先生、お元気ですか。先生の顔色が悪くて病気の様ですね。先生大丈夫ですか。もし病気になったら、先生ゆっくり休むほうがいいと思います。〈呼びかけ→配慮→命題→配慮→配慮〉
- ・先生、お顔色がちょっと良くないです。ご具合は大丈夫でしょうか。何か感じておられませんか？気分悪ければ、休んだほうがいいと思います。是非、病気になされないようにしてください。ご健康は何よりのものです。〈呼びかけ→命題→配慮→命題→配慮→配慮→配慮〉

上の回答例からも分かるように、3者の中で特にCJLの言語内容にJNSやKJLとは異なる特徴が見られた。5つ以上の要素を組み合わせている人がJNSには一人もいなかったのに対して、KJLには2名、CJLには5名もいたことは注意すべき結果である。CJLの談話構成要素の平均数が多いことは<表1>の結果からも明らかになったが、CJLは相手に対する配慮表現を繰り返し使用する傾向があった。配慮表現の中には、「休んだほうがいい」と

いう助言や、「本当に大丈夫ですか」のような状況を確認する表現が使われていた。配慮表現を繰り返し使うことによって聞き手を心配しているという話し手自身の気持ちを確実に伝え、両者が密接な関係であるかのように表現していることが分かった。

ところが、相手に対する配慮の表現を多用することが必ずしも両者の良好な関係の構築につながるわけではない。第2節で述べたように、聞き手のパーソナル・テリトリーに関わる内容については、言及を避け、踏み込んだ発話を回避することによって距離感が保たれ、丁寧さが増す。CJLの聞き手に対する配慮表現の反復がかえって不快感を与えたり、踏み込みすぎた発話につながったりする恐れがある。

以下、KJLとCJLに見られた相手に対する配慮表現の中で、助言、断定、確認するような表現が含まれている例をあげる。配慮表現は____で示し、その内容は〈 〉で示す。

[KJL]

- ・先生、顔色がよくないですけど、大丈夫ですか。少しお休みになったほうがよろしいと思うのですが。〈助言〉
- ・先生、大丈夫ですか。ちょっと顔色が悪そうですけど…。少し休むほうがいいんじゃないですか。〈助言〉
- ・先生、大丈夫ですか。顔色が悪いんです。時間があつたらちょっと休むほうがいいと思うんですけど…。大丈夫ですか。〈助言〉

[CJL]

- ・先生、顔色がちょっと悪いですけど。私は心配しています。大丈夫ですか。手伝って差し上げますか。〈申し出〉
- ・先生お元気ですか。先生の顔色が悪くて病気の様ですね。先生大丈夫ですか。もし病気になったら先生ゆっくり休むほうがいいと思います。〈助言〉
- ・先生の体がよくなさそうです。残念でした。病気でしたか。そうだったら今日の授業はできないですね。〈断定〉
- ・先生の顔色が悪そうですが、休んだほうがいいです。〈助言〉
- ・先生の顔色が悪くなるようで、大丈夫ですか。すこし、休んだほうがいいですよ。〈助言〉
- ・先生、お顔色がちょっと良くないです。ご具合は大丈夫でしょうか。何か感じておられませんか？気分悪ければ、休んだほうがいいと思います。是非、病気になされないようにしてください。ご健康は何よりのものです。〈助言〉
- ・先生、体のほうは大丈夫でしょうか？間違いかもしれませんが、先生の顔色が良くないみたいなので、ちょっと心配しています。本当に大丈夫でしょうか。〈確認〉

談話を構成する要素を多く使うことによって丁寧さが増す場合もあるが、相手に対する

配慮表現がかえって聞き手のパーソナル・テリトリーの領域に踏み込んでしまう場合もある。上記の例では先生の健康状態を気遣う話し手の気持ちは伝わるが、目上である先生に対して休むように助言をしたり、体調不良の状況を確認したり、病気であることを断定するような表現を用いているため不快感を与える恐れがある。丁寧体の世界で以上のような発話を行うことは日本語によるコミュニケーションとしては不適切である。

しかし、CJLの母語である中国語の回答には、聞き手の健康を心配して気遣う表現として「我陪您去医院看看吧（一緒に病院に行きましょう）」「少し休みませんか」などのような表現が使われており、相手に対する配慮の仕方にJNSとは異なる特徴を有していることが分かった。

たとえば、次のような中国語の表現が使われていた。_____は助言、もしくは病院まで付き添うという申し出の表現を表す。

- ・老师看起来有点累，还好吧？要不先休息一下？
（先生、疲れたように見えますが、大丈夫ですか。すこし休みませんか。）³
- ・老师，您是不是不舒服，我陪您去医院看看吧！
（先生、気分が悪いですか。一緒に病院に行きましょう。）
- ・老师您脸色很差，需不需要去医院看一下。
（先生お顔色がとても悪いですが、病院へ診察を受けに行きませんか。）
- ・您今天的脸色不太好。是不是工作太辛苦了，有没有感觉哪里不舒服。如果，您感觉不是很好的话，建议您今天稍微多休息一下。身体健康是最重要的。
（今日お顔色があまり良くないです。仕事が大変でしょうか。どこか具合が悪いですか。もし気分が悪いなら、今日は休むことを勧めます。健康が一番大切です。）
- ・老师，您好。是不是不舒服？看起来您的脸色不太好。需要我帮忙吗？
（先生、こんにちは。気分が悪いですか。お顔色が良くなく見えます。お手伝いしましょうか。）
- ・老师您是不是身体有什么不舒服，您的脸色看起来不太好，是否需要我陪您去医院看看。
（先生、ご気分が良くないですか。お顔色が良くなく見えますが、一緒に病院に行きませんか。）
- ・老师，今天您的脸色看起来不太好，是不是病了，还是去医院看一下比较好！
（先生、今日お顔色は良くなく見えますが、病気になりましたか。やはり病院に行ったほうが良いです。）

中国人母語話者によると、上の例のような休んだ方がいいという助言や、病院まで付き添うという申し出の表現は中国語では先生に対しても普通に使われているという。しかし、日本では先生に対する学生の発話としては一般的ではない。中国語で普通に使われている

からといって日本語で同じ表現を使うと、聞き手を戸惑わせることになるかもしれない。このように、日本語と中国語の間には、聞き手に対する配慮表現に違いが存在していることが分かった。

他方、KJLの母語である韓国語について分析した結果、CJLの中国語と同じように、聞き手に対する配慮表現として「休んだ方がいい」という助言を表す表現が使われていることが分かった。たとえば、次のような例である。

- ・ 선생님, 오늘 얼굴색이 안 좋아 보이는데, 괜찮으세요? 좀 쉬시는게 좋을걸 거 같은데...

(先生、今日、顔色がよくないようですが、大丈夫ですか？少し休んだ方がいいと思いますが...)⁴

- ・ 선생님, 괜찮으세요? 안색이 안 좋아 보이시는데... 좀 쉬시는게 어떠세요?

(先生、大丈夫ですか？顔色が良くないように見えるんですが...少し休んだらどうでしょうか？)

- ・ 혁, 선생님, 오늘 어디 안 좋으세요? 식사는 하셨어요? 잠은 잘 주무셨어요? 몸 잘 챙기셔야죠. 걱정되잖아요.

(あら、先生、今日、どこかよくないんですか？食事はなさいましたか？睡眠はとっていますか？体調管理には気をつけてください。心配になるじゃないですか。)

- ・ 선생님 어디 편찮으세요? 오늘 너무 안 좋아 보이세요. 쉬셔야 하는 거 아니에요?

(先生、どこかお悪いんですか？今日、顔色がとても悪くみえます。休まなければならないんじゃないですか？)

韓国語母語話者は先生と学生のように上下関係が明確な場合、非常に丁寧な表現を用いるのが一般的であり、本調査におけるKJLの韓国語も敬語を使った丁寧な表現を用いていた。それにも関わらず、「좀 쉬세요 (ちょっと休んでください)」「식사는 하셨어요? (食事はしましたか)」잠은 잘 주무셨어요? (よく眠れていますか)」몸 잘 챙기셔야죠. (体調管理はしっかりしなければなりません)」걱정되잖아요 (心配になるでしょう)」といったアドバイスのような回答例が見られた。聞き手の健康を配慮しつつも、踏み込んだ言語内容について言及することによって話し手の心配している気持ちを伝えようとしている。KJLの日本語は韓国語ほど踏み込んだ発話ではなかったが、JNSの日本語に比べてかなり踏み込んだ内容について言及していた。以上の回答例から、CJLとKJLが日本語でコミュニケーション活動を行う際に学習者の母語のコミュニケーション・スタイルの影響を受けているということがいえる。

他方、JNSの場合、談話を構成する言語内容はKJLやCJLより少ないが、丁寧さを保つために、それぞれの言語内容を表す表現形式に様々なストラテジーを使用していることが分かった。聞き手が目上であり、健康状態をうかがうというパーソナル・テリトリーに関わる発話であるため、距離を保ちつつ、適切な表現を使うためにさまざまなストラテジーを使用していたものと思われる。

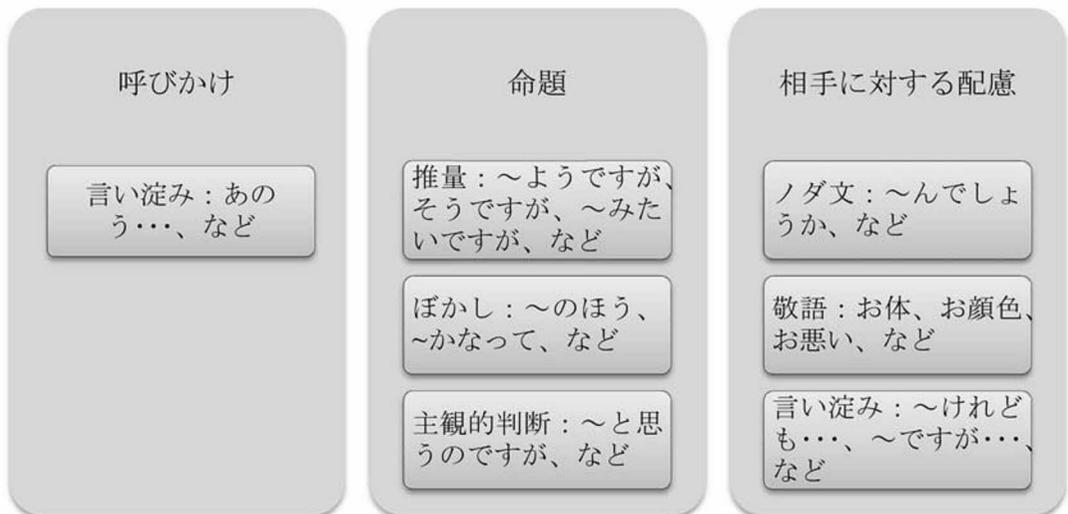
次節ではそれぞれの言語内容を表すために使われた表現形式に焦点を当てて分析を行う。

4.2 言語内容の表現形式

一般的にパーソナル・テリトリーに関わる言及は回避されると前述したが、聞き手のパーソナル・テリトリーに関わる言語内容に触れなければならない場合は、相手のパーソナル・テリトリーを侵害した行為を補うために何らかのストラテジーを使用し、配慮の意味を表すと考えられる。たとえば、敬語や推量の表現を使用したり、ぼかし表現を使ったり、言い淀んだりする表現がその例であろう。

前節でJNSとKJL、CJLは聞き手のパーソナル・テリトリーに関する言語内容を表す際に異なる談話を構成していることについて述べた。それぞれの言語内容を表す際にどのような表現形式を用いるかを考察することによって、KJLとCJLの日本語学習における問題点が明らかになるとと思われる。

そこで、本節では、それぞれの言語内容に含まれる表現形式に焦点を当てて、調査結果を分析する。それぞれの談話要素に使われた表現形式をまとめると、次の<表4>のように分類することができる。



<図4> 言語内容の表現形式

上の図でまとめたように、「呼びかけ」「命題」「相手に対する配慮」の意味を表すために様々な表現を用いていたことが分かった。命題である「先生の具合が悪い」ことを伝える際には断定する表現を避け、推量の「ようだ、そうだ、みたいだ」の表現が使われていた。その他にも「お体のほう」のようなぼかし表現、「～と思うのですが」のような主観的な判断のような表現が多く使われていた。また、相手に対する配慮を表す表現形式としてはノダ文、敬語、言い淀みなどが使われていた。

まず、命題を表現する際に使われた表現形式についてまとめると次の通りである。

＜表2＞ 命題を表す言語形式

	ようだ	そうだ	みたい	みえる	～のほう	～かな	～と思う
JNS	12	1	2	1	2	1	0
KJL	3	5	1	9	1	0	2
CJL	3	7	1	2	0	0	1

命題を表す表現形式でもっとも大きな特徴は、JNSの「ようだ」の多用である。「お顔の色がすぐれないようですが…」「顔色が悪いようですが」のように話し手の主観的な判断であることを表すために「ようだ」を多用していたと思われる。それに対して、KJLとCJLは「ようだ」よりも「そうだ」を多く使っており、JNSとは異なる特徴があることが分かった。次のような例が使われていた。

- ・先生、なんだか調子がよろしくないようですが、具合のほう、いかがでしょうか。(JNS)
- ・先生、顔色がよくないようですが、お体の調子はいかがですか。(JNS)
- ・先生、顔色が良く悪そうに見えますが、お身体の調子が良くないのですか (KJL)
- ・先生、どうしましたか？すごく体調悪そうですけど、大丈夫ですか？ (KJL)
- ・先生、具合が悪そうですね。病気になりましたか？お大事に。(CJL)
- ・先生、顔色が悪そうですが、お体は大丈夫でしょうか。(CJL)

JNSは「ようだ」の推量表現を使うことによって改まった印象を与え、「(顔色が) 悪い、よくない」などのマイナス評価は話し手の主観的な判断であることと表していると思われる。一方、KJLとCJLは「そうだ」を使用しており、聞き手の外見について直感的に感じたことを言及するにとどまっており、丁寧さのニュアンスは含まれない。JNSは話し手の判断を表す推量表現の場合でも聞き手や発話状況によって表現形式を使い分けていることがうかがえる。

その他に、KJLの「悪く見える」という表現が多く使われていることが分かった。日本語の「～みえる」という表現は、韓国語では「보이다/boida/みえる」で表現することが

でき、推量表現として頻繁に使われているため、韓国語の影響を受けているのではないかと思われる。たとえば、次のような例が見られた。

- ・きのせいかもしれませんが、先生の顔、いつもとはちょっと違うように見えますが、元気ですか。(KJL)
- ・あの、先生、最近先生の顔色が悪そうに見えますが、体の具合は大丈夫ですか。(KJL)
- ・先生、ちょっと具合が悪そうに見えるんですが、体調は大丈夫ですか。(CJL)
- ・先生、今日はどうかされました？顔色が悪くみえますけれども… (JNS)

推量の意味を表す「ようだ、そうだ、みだいだ」および「見える」を合わせた使用頻度は、JNSは29名中16名で約55%、KJLは35名中18名で51%、CJLは27名中14名で51%であり、3者ともに半分以上が推量の表現を使用していた。しかし、3者ともに推量表現を使用している点では共通しているが、表現形式では違いが見られた。

次に、相手に対する配慮表現として使われた言語形式を分析した結果は次の通りである。

〈表3〉 相手に対する配慮表現の言語形式

	気がする	間違いかもしれません	ノダ文	言い淀み	敬語
JNS	0	0	10	5	17
KJL	1	0	11	8	7
CJK	0	1	1	0	6

言語内容に関する分析の結果と同様、言語表現形式に関する分析においても配慮の意味を表す表現に明らかな違いが現れた。特に、敬語の使用において3者の結果が大きく異なっていた。敬語の使用は、JNSが17例もあったのに対して、KJLは8例、CJLは6例しか現れていなかった。JNSでは「お顔色、お体、お疲れ、お悪い」などの丁寧語が最も多く、パーソナル・テリトリーに関わる内容について言及するという意識が強く働いており、丁寧さを保つための戦略として敬語を積極的に使用していたのではないかと思われる。他方、KJLは「お体」の丁寧語が5例、その他に「すぐれない、よろしくない」が1例ずつ使われていた。CJLは「お元気」が4例、「お顔色」が1例、「ご具合」が1例ずつ使われていた。

また、「～んでしょうか」のようなノダ文、「～と思うのですが…」のような言い淀みはJNSとKJLにおいて使われており、発話全体を柔らかく、婉曲に表現しようという意識が働いているものと思われる。たとえば、次のような表現が使われていた。

- ・先生、お疲れですか？あまり元気がないのかなって思うのですが…。(JNS)
- ・先生、顔色がお悪いようですが、体調がよくないのでしょうか。(JNS)

- ・先生、今日、体調大丈夫ですか。顔色があまりよくないのですが…。(KJL)
- ・先生、ちょっと…。大丈夫ですか。ちょっと顔色が…。(KJL)
- ・先生、ちょっと具合が悪そうに見えるんですが、体調は大丈夫ですか。(CJL)

しかし、KJLの中には「先生、今顔色が悪いんです」「今日、顔色が悪いんですね」のような状況説明のノダ文を使用している例もあり、ノダ文の使用に関する問題が残されている。KJLのノダ文の不適切な使用に関しては様々な指摘がなされているが、今後さらに分析が必要であろう。

5. おわりに

日本語教育現場では丁寧体で話しているにも関わらず、丁寧さの観点からは不適切な表現を用いる学習者が少なくない。日本語母語話者なら言及を避ける聞き手の固有領域に関する内容であっても、学習者は踏み込んだ発話を行ったり、相手に対する配慮表現が使用しなかったりするのが一因ではないかと思われる。

本稿では、聞き手のパーソナル・テリトリーに関わる言語内容を表現する際に、日本語母語話者、韓国人日本語学習者、中国人日本語学習者がどのような談話を構成し、どのような言語形式を使用するかについて調査分析を行った。その結果、3者の間には談話構成および言語表現形式において相違点が存在していることが分かった。JNSは改まった表現を使って距離感を保つことに重点を置いているのに対して、KJLやCJLは直感的な印象や話し手の気持ちを親密に表現することに重点を置いていることが分かった。

本研究は韓国人・中国人日本語学習者の聞き手との関係の捉え方や日本語の表現に関する背景を理解するうえで貴重なデータが得られた。他のパーソナル・テリトリーに関わる発話の分析は今後の課題としたい。

注

- 1 「力関係」とは、南(1987)の8種(身分的、生得的、経歴、役割的、差別的、能力的、立場的、絶対的)の上下関係を含むものとして解釈する。
- 2 「?」「…」などはアンケート調査に使われている例をそのまま転載したものである。KJL、CJLの例には日本語として不適切な表現もあるが、訂正せずそのまま転載した。
- 3 中国語に対する日本語の翻訳は中国人母語話者によるもので、中国語のニュアンスを表すため、直訳したものである。
- 4 韓国語に対する日本語の翻訳は筆者によるものである。韓国語のニュアンスを表すため、可能な限り直訳したものである。

参考文献

- 任栄哲 (2006) 「韓国人とのコミュニケーション」『韓国人による日本社会言語学研究』
おうふう：7-19
- 尾崎喜光 (2008) 『対人行動の日韓対照研究—言語行動の基底にあるもの—』ひつじ書房
- 熊谷智子 (1995) 「依頼の仕方—国研岡崎調査のデータから—」『日本語学』14-10 明治
書院：22-32
- 杉戸清樹 (1996) 「メタ言語行動の視野—言語行動の「構え」を探る視点—」『日本語学』
15-10 明治書院：19-27
- 鈴木睦 (1997) 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」『視点と主観性』くろしお
出版：45-74
- 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』研究社
- 角田太作 (1990) 「所有者敬語と所有傾斜」『文法と意味の間』くろしお出版：15-27
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 中田智子 (1990) 「発話の特徴記述について—単位としてのmoveと分析の観点—」『日本
語学』9-11 明治書院：112-118
- 許明子 (2009) 「공유감을 만드는 한국어, 거리감을 두는 일본어」『언어
표현을 통해서 본 한일문화』韓国日語日文学会 J&C出版社：277-293
- 許明子 (2010a) 「日本語と韓国語の聞き手の私的領域に関する言語行動—韓国人日本語学
習者と日本語母語話者の言語行動に関する調査を通して—」『地域研究』第31号 筑
波大学人文社会科学部研究科：25-44
- 許明子 (2010b) 「日韓対照研究と日本語教育—話し手と聞き手との関係から見た日本語
と韓国語の言語行動について—」『日本語教育研究への招待』くろしお出版：273-288
- 許明子・孟熙 (2010) 「聞き手の私的領域に関する言語行動の日韓中の比較対照—聞き手
に対する依頼場面を中心に—」日本語教育世界大会2010予稿集、於台湾国際政治大学
- 南不二男 (1987) 『敬語』岩波新書